［課程－２］

審査の結果の要旨

氏名　勝屋　友幾

本研究は、有効な治療法の少ない希少がんである胸腺上皮腫瘍（胸腺腫および胸腺癌）の治療法の開発のため、免疫チェックポイント阻害薬の抗 PD-1 抗体薬、抗 PD-L1 抗体薬の治療効果と関連する腫瘍細胞の PD-L1 発現を評価した。予後との関連等についても検討し、下記の結果を得ている。

1. 胸腺上皮腫瘍 139 例（101 例の胸腺腫、38 例の胸腺癌）の手術切除検体を用いて、後方視的に、抗 PD-L1 抗体（clone E1L3N）による免疫組織化学染色を行った。胸腺腫の 22%、胸腺癌の 70%で、PD-L1 陽性（H-score、カットオフ値 1%）であった。
2. PD-L1 発現は胸腺上皮腫瘍において、予後予測因子ではなかった。
3. 化学療法施行例では、その前後での PD-L1 発現の変化を検討できた胸腺腫 6 例で、化学療法施行後に、PD-L1 発現が増加する傾向が見られた。

本研究成果をもとに、切除不能・再発胸腺癌に対する抗 PD-1 抗体薬 nivolumab の第 II 相試験が行われた。胸腺上皮腫瘍の治療開発に重要な貢献をなしたと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。